



1 目的

防災・減災について自分事として捉え、自助・共助・公助に関して学ぶと共に、体験を通じて深く考える機会を提供する。また、被災時の生活を体験することにより、日頃の備えの大切さを確認するとともに被災時に何ができるかを考えて行動できることを目指す。

2 対象

小学4～6年生 14名(男子：5名、女子：9名)

3 協力

陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地、日本 DMC 株式会社 (以下、「日本 DMC」という。)

4. 協賛

能美防災株式会社

5 日程

	10:00	10:30	11:00	12:00	13:00	16:00	18:30	19:30	21:30
10月12日(土)	受付	開会式	アイス ブレイク	昼食	自衛隊講話 シチュエーションゲーム	防災 クッキング	入浴	停電時の 生活体験	就寝
10月13日(日)	6:00 起床 片付け	7:00 非常食体験 片付け	9:30 ドローンを使った 活動体験	11:30 昼食	12:30 感想発表 閉会式	14:00			

6 事業内容

【事業1日目】10月12日(土)

(1) 自衛隊講話、シチュエーションゲーム

陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地の隊員(以下、「自衛隊員」という。)より、DVDの視聴及び講話を通じて公助(特に自衛隊の活動)についての説明をいただいた。その後、8名の自衛隊員にご協力いただき、毛布や物干し竿、ロープを用いた担架作りに加え、ゴミ袋や新聞紙、定規を用いた骨折の応急処置方法、土のう作りの方法を参加者同士で相談し試行した後、自衛隊員から実際の方法や作成上のポイントについて説明を受けた。

(2) 防災クッキング

包丁や皿の洗浄が不要なポリ袋を用いて、和風パスタとわかめの酢の物を調理した。必要な材料は、いずれも長期保存が可能で備蓄しやすい食品を選定した。また、災害時の状況を意識し、水の使用についても制限した状況で実施した。

(3) 寝床設営

避難所を想定したプライベートスペース確保のため、段ボールを使用し参加者自身で行った。

(4) 停電時の生活体験

被災してライフラインが制限された状況を想定した活動を行った。ランタンの灯りを頼りに1日の振り返りを行い、その後さすがに不要な液体歯磨きで歯を磨いた。



シチュエーションゲーム(応急処置の場面)



防災クッキング



寝床設営、停電時の生活体験

【事業2日目】10月13日（日）

(1) 朝のつどい、非常食体験（朝食）

非常食体験では長期保存が可能で水またはお湯のみで調理できるレトルトカレーを食べた。またデザートには、能美防災株式会社からご提供いただいた長期保存可能なアレルギーフリーのクッキーを試食した。

(2) ドローン体験

日本 DMC のご協力の下、被災地におけるドローンの活用についての体験を行った。ドローンを初めて操作した参加者が多かったが、どの参加者も障害物をかわし、被災地に見立てた状況を正確に把握することができた。

(3) 行動宣言

2日間の振り返りを行い、それを基に参加者自身が今後防災において意識したいことや行動していきたいことを宣言した。参加者の行動宣言は、「家族と相談する」ことや、「災害備蓄品を今のうちに確認しておく」など、2日間の体験を通して自身がより大切にしたいことを文字や言葉にした。



非常食体験



ドローン体験



感想発表・行動宣言

6. 企画運営のポイント

- ・事業目的である「自助・共助・公助の理解」ができるよう、1つ1つの活動プログラムが自助・共助・公助のいずれかと関連性があるように企画した。
- ・陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地に協力を依頼し、公的機関における災害救助（＝公助）についてプロの声を参加者に届けられるようにした。また、応急処置や担架作り、土のう作りの方法を自衛隊員から直接教わることで普段接する機会がない自衛隊員との交流や、参加者のより深い理解に繋がるようにした。
- ・事業開始前から参加者が災害備蓄品について考える時間を作れるように、1日目夜の振り返りの時間で食べるお菓子は日持ちするものであるよう指定し、家族でどのようなものがあるかを事前に相談する機会を設けた。

7. 参加者の声（事後アンケートより抜粋）

- ・最近の災害の大きさが大きくなってきている気がするので、災害に対する備えをしっかりとしていきたいと思いました。
- ・家にある備蓄品や水の備えをもう一度見直したいと思いました。
- ・このキャンプに去年も参加したけどさらに防災の意識が変わったのでまた再確認したい。

8. 成果と課題

(1) アンケート結果 回収9名（参加者14名・回収率64%）

事業全体の満足度			
満足 9名（100%）	やや満足 0名（0%）	やや不満 0名（0%）	不満 0名（0%）

(2) 成果と課題

- 昨年度の反省を活かし、はじめの会から自衛隊員に参加いただいた。アイスブレイクも一緒に行ったことで、参加者とのコミュニケーションが図れ、昼食も会話が弾んだ。また、昼食後の自由時間では、所内の「かたらいの広場」で一緒に遊ぶ姿も見られ、参加者にとって有意義な時間となった。
- シチュエーションゲームでは最初から自衛隊員に教わるのではなく、参加者同士で話し合い、試行する時間を設けた。これまでの経験を活かした発想や新たなアイデアが見られ、参加者の創造力を育むことができた。災害時における自助の面では、自分の身を守るために臨機応変な対応も必要であるため、自分で考える時間を設けることは防災・減災の観点からも有効だと考えられる。
- 事業全体で災害時を想定し、ライフラインや食料、道具などに制限をすることで、参加者同士で思いやる気持ちや、お互いに助け合う姿が見られた。
- 被災地でのドローン技術の活用が進んでいることから、当所が日本 DMC と締結した連携協定に基づき、ドローンの飛行体験を企画した。被災地での活用状況（日本 DMC は能登半島地震後、現地で活動）の説明を受けた後、実際の被災地の状況を模擬的に設定し、ドローンによる被災者の状況把握を行った。初めて体験する参加者も多かったが、どの参加者も上手く操作することができた。また、体験後は屋外にてドローンによる上空からの記念撮影を行った。
- 今回、参加者数が伸びなかった理由は広報の遅れが大きい。秋は週末のイベントが多く、参加者を増やすためには可能な限り早く広報することが重要である。